

ジムリ・リム時代のシャーピトウムの責務

櫻井 絵美夏

1 はじめに

ジムリ・リムは、マリ王国における西セム系アムル人王朝の最後の王である。マリ王国でのアムル人の支配権は、ジムリ・リムの「父」ヤフドゥン・リム^①が確立したのだが、ヤフドゥン・リムの死後、マリ王国はシャムシ・アダドの王国に組み込まれた。シャムシ・アダドは、マリの王位に息子の一人ヤスマフ・アツドゥウを据え、その王国はティゲリス川からユーフラテス川にかけての北メソポタミアにまたがる広大なものであった。ジムリ・リムがマリ王となったのは、シャムシ・アダドが前一七七五年に死んだ後である。シャムシ・アダドの死後、亡命先からマリに戻ったジ

ムリ・リムは、ヤスマフ・アツドゥウを追放し、マリ王として即位した。ジムリ・リムは約一三年間王国を統治したが、最後はバビロン王ハンムラビによって滅ぼされた。

マリ王国は、定住民と遊牧民双方をその支配下に置いており、ユーフラテス川沿岸に広がる定住民の居住区には、マリ、テルカ、サガラトウム、カトゥナン^②の四つの地区（ハルツム）があった。シャーピトウムはそれぞれのハルツムの長である。シャーピトウムの職務は多岐にわたり、穀物の刈り入れ、イナゴやバッタの害への対応、運河の修復、神殿や城塞の壁の修復など内政に関することから、地域情勢の把握など外交に関するものも含まれた。一方、遊牧民はメルフムに統括させた^③。メルフムとは、「放牧地へ導く者」の意味で、遊牧民たちを束ねていた。マリ王国を

構成する主要な部族は、シムアル系部族とヤミン系部族であったが、ジムリ・リムの出身部族であるシムアル系部族のメルフムが王国において重きをなしているのに対し、ヤ

	シャーピトゥム	おそらくシャーピトゥム
マリ地区	スム・ハドゥ (即位～1) バフデイ・リム (5～13)	イトウル・アスドゥ (1～4)
テルカ地区		サムメタル (1) キブリ・ダガン (1末～13)
サガラトゥム地区	スムフ・ラビ (2～4) イトウル・アスドゥ (4末～5) ヤキム・アッドゥ (5～13)	ハブドゥマ・ダガン (即位～2)
カトゥナン地区	アキン・ウルバム (即位～1) イッディン・アンヌ (1) イルシュ・ナツイル (1～4) ヤタルム (12～13)	ザキラ・ハンム (4～11)

ミン系部族のメルフムに
関してはよくわかってい
ない。⁽³⁾

今回とりあげるのは、
シャーピトゥムについて
である。マリ王国には、
シャーピトゥムやメルフ
ムのほかにも数多くの官
吏がいるが、内政や外交
に大きな役割を果たした
シャーピトゥムの把握
は、マリ王国の行政組織
をとらえるうえで、重要
な意味を持つと思われる。
シャーピトゥムに関
する体系的な研究は、リ
オンが行っている。リオ
ンは二〇〇一年の論文
で、上記の表中の人物を

シャーピトゥムとして挙げて⁽⁴⁾
いる。

表中の見出し語の「シャーピトゥム」は、リオンが
シャーピトゥムとして挙げた人物のうち、書簡に「シャー
ピトゥム」という役職名が明記してあったり、「シャーピ
トゥム職についていた」などと書かれたりして、その
人物がシャーピトゥムであったことが確実である人物であ
る。

たとえば、マリ地区のスム・ハドゥは ARM 8-84⁽⁵⁾ に
「シャーピトゥムであるスム・ハドゥ」⁽⁶⁾と記されているし、
バフデイ・リムも ARM 27-151 で「シャーピトゥムである
バフデイ・リム」⁽⁷⁾と明記されている。しかし、書簡に名前
とともに役職名が併記してあることは稀であり、それがマ
リ王国の行政組織の全体像を描き出すのをより困難にして
いる。ただ、書簡の内容からその人物がどんな役職につい
ていたのかわかる場合はある。その一つが、次のあげた、
サガラトゥム地区のシャーピトゥムであるヤキム・アッ
ドゥが王ジムリ・リムに宛てた書簡である。

「話変わって、スムフ・ラビがサガラトゥム地区で
シャーピトゥム職についていたとき、六〇イクの耕地
をビート・アツカカに保有しておりました。そしてイ
トゥル・アスドゥが任命されたとき、前任者のよう

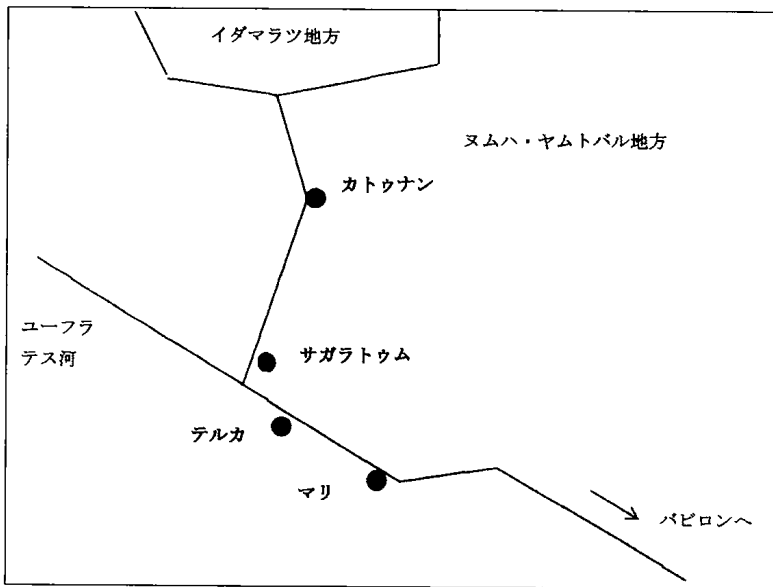
に、ジブナトゥムにXイクの耕地を保有しておりました。今、私はXイクの耕地を受け取りました⁽⁸⁾」

ここから、スムフ・ラビだけでなく、イトウル・アスドゥやヤキム・アッドゥもサガラトゥム地区のシャーピトゥムであつたとわかる。

見出し語の「おそらくシャーピトゥム」は、その人物がシャーピトゥムであることを明記した史料はないが、書簡に記された仕事内容などからシャーピトゥムであるとリオンが推測している人物である。なお、表中の人物名の横の数字は、その人物がジムリ・リム治世の何年にシャーピトゥムを務めていたかを示したものであるが、リオンの推測も多くそれほどの実性はない。

シャーピトゥムが治める四つの地区は、それぞれマリ、テルカ、サガラトゥム、カトゥナンという四つの中核となる都市を中心とした地区であり、おおまかな位置関係は下の図のようになっていいる。四つの都市のうち、マリ市は王国全体の都でもあり、王が住む王宮がある。図の中の、イダマラツ地方やヌムハ・ヤムトバル地方はマリ王国には含まれない。これらの地方には多くの小国があり、マリ王国の外交上、重要な地域であつた。

リオンは、ジムリ・リム治世一三年間におけるシャーピ



トゥムの名を挙げたが、まだわからないことも多い。そこで今回はリオンの説を検討するために、彼らが使っている定型句に注目した。ここでの定型句というのは、書簡の最初か最後の方に使われる「○○、○○は平穩です」という表現であり、すべての書簡で必ず用いられているわけではないが、シャーピトゥム以外でも多くの官吏がこのような表現を使っている。例として、ジムリ・リム時代のメルフムの一人であるイバル・エルは、「家畜とシムアル系部族は平穩です⁽⁹⁾」と述べ、イダマラツ地方にあるナフルという町に赴任していたシャクヌという官吏は、「ナフルの町は平穩です⁽¹⁰⁾」と述べている。

このように、定型句は役職によって使い分けられている。シャーピトゥムが使っている。

る定型句は「○○の町および地区（ハルツム）は平穩です」というものであり、そのことはマルツアルやシャルパンも指摘している。⁽¹¹⁾しかし、地区によってはシャーピトゥムでなくても「○○の町およびハルツムは平穩です」という定型句を使う官吏もおり、リオンはこの定型句は役職や職能を決める手がかりにはならないとしている。⁽¹²⁾

だが、本当に定型句はシャーピトゥムであるかどうかを決める手がかりにはならないのだろうか。本論文の目的は、定型句からリオンの説を検討することであるから、まずリオンが挙げたシャーピトゥムが使っている定型句と、シャーピトゥムとはされていないが、マリ、テルカ、サガラトゥム、カトゥナンというシャーピトゥムの治める行政区の中核となる町の名前を含んだ定型句をまとめてみた。そして次にシャーピトゥムと定型句の関係について考察していきたい。

2 シャーピトゥムの定型句

マリ地区から順に、「シャーピトゥム」、「おそらくシャーピトゥム」、「シャーピトゥム以外」の使っている定型句について記した。リオンがシャーピトゥムとして名前を挙げているのに表中に記載がないのは、刊行されている

		シャーピトゥム	おそらくシャーピトゥム	シャーピトゥム以外
①	バフディ・リム Bahdi-Lim	「マリの町、王宮、および地区（ハルツム） ⁽¹³⁾ は平穩です」 ⁽¹⁴⁾		
②	イトウル・アスドゥ Itur-Asdu		「マリの町および王宮は平穩です」 ⁽¹⁵⁾ 「マリの町は平穩です」 ⁽¹⁶⁾ 「マリの町、我々の神殿、王宮および収容所は平穩です」 ⁽¹⁷⁾	
③	バンナム Bannum			「マリの町、王宮、およびユーフラテス沿岸は平穩です」 ⁽¹⁸⁾
④	マナタン Manatan			「マリの町、王宮、神殿、収容所および私の守備隊に関しては平穩です」 ⁽¹⁹⁾ 「マリの町、収容所、王宮および神殿は平穩です」 ⁽²⁰⁾
⑤	ヤシム・スム Yasim-Sumu		「王宮および収容所は平穩です」 ⁽²¹⁾ 「マリの町、神殿、王宮および収容所は平穩です」 ⁽²²⁾	

⑥	アビメキム Abimekim		「マリの町は平穩です、王宮は平穩です、神殿および収容所は平穩です」 ⁽²³⁾	
⑦	サムメタル Sammetar		「テルカの町、ダガン神および地区は平穩です」 ⁽²⁴⁾	
⑧	キブリ・ダガン Kibri-Dagan		「ダガン神とイクルブ・エル神は平穩です。テルカの町および地区は平穩です」 ⁽²⁵⁾	
⑨	ヤキム・アッドウ Yaqqim-Addu	「地区は平穩です」 ⁽²⁶⁾ 「館は平穩です。地区、サガラトゥムの町(?)およびドゥール・ヤフドゥン・リムは平穩です」 ⁽²⁷⁾		
⑩	アキン・ウルバム Akin-Urubam/ Yakun-Urubam	「(カトゥナンの) 町および地区は [平穩です]」 ⁽²⁸⁾		
⑪	イルシュ・ナツイル Ilušu-Našir	「カトゥナンの町および地区は平穩です」 ⁽²⁹⁾		
⑫	ザキラ・ハンム Zakira-Hammu		「カトゥナンの町および地区は平穩です」 ⁽³⁰⁾	
⑬	ラウム La'um			「カトゥナンの町および地区は平穩です」 ⁽³¹⁾
⑭	ジムリ・アッドウ Zimri-Addu			「カトゥナンの町および地区は平穩です」 ⁽³²⁾
⑮	ハドニ・イルマ Hadni-ilum-ma			「カトゥナンの町および地区は平穩です」 ⁽³³⁾
⑯	ヤタルム Yatarum	「カトゥナンの町および地区は平穩です」 ⁽³⁴⁾		

書簡の中に定型句の使用が見つからなかったものである。

この表をみると、マリ地区のシャーピトゥムは王宮に触れ、テルカ地区のシャーピトゥムはダガン神にも触れているというような地区ごとの特徴はあるものの、ほとんど同じような定型句を使っていることがわかる。ほとんどのシャーピトゥムは、自分が行政をまかされた町の名と地区に触れている。この定型句は、自らの責務を示していると考えられる。たとえば、表中③のバンヌムはヤスマフ・アッドウ時代のメルフムであったが、ジムリ・リムの即位後、メルフムとしての仕事よりも王宮での仕事を優先して行うようになった⁽³⁵⁾。そのため、メルフムがよく使う放牧地や家畜、部族などに關する定型句⁽³⁶⁾ではなく、「マリの町、王宮、およびユーフラテス沿岸は平穩です」という定型句を使っているのだと思われる。シャーピトゥムとは地区の長であるから、担当する町や地区に触れるのはもつともだといえる。しかしその中で、おそらくマリ地区のシャーピトゥムだとされるイトウル・アスドゥだけは、地区に言及していな

い(表②)。また逆にカトゥナン地区では、シャーピトゥムではないとされているのにシャーピトゥムと全く同じ定型句を使っている官吏が三人いる(表⑬⑭⑮)。これらの問題について、どのように解釈すればよいであろうか。

3 ジムリ・リム治世前半のマリ地区の

シャーピトゥム

イトウル・アスドゥは、リオンだけでなく他の研究者にも「マリ地区のシャーピトゥム」と認識されている高官であるが、彼が使っている定型句はシャーピトゥムであるバフディ・リムのもの(表①)より、むしろシャーピトゥムではないマナタン(表④)、ヤシム・スム(表⑤)、アビメキム(表⑥)らのもので似ている。彼らの役職はそれぞれ異なると思われる。マナタンはジムリ・リム治世一―一三年にかけての王宮の高官であり、ジグラーは、彼は都マリの守備に責任のある人物だったのではないかと推測している。⁽³⁸⁾ヤシム・スムは王宮の経理担当者であると思われる⁽³⁹⁾シャーダバツクムであり、アビメキムは正式な役職名はわからないものの、バビロン方面への使節の役目をよく務めている。⁽⁴⁰⁾マリ地区には王宮があるから、王宮で働く高官も数多くいたはずである。

イトウル・アスドゥは、ジムリ・リム治世一年第一一月にマリの王宮で王の賓客であるクルダ王シマフ・イラネを迎えたりしているから、⁽⁴¹⁾彼がジムリ・リムの治世初期にマリ市でかなり高位の役職についていたことは確かである。しかし、地区の長であるシャーピトゥムが定型句で地区のことに触れていないのは、やはり奇妙に思える。イトウル・アスドゥはマナタン、ヤシム・スム、アビメキムらのように王宮で働く高官の一人であり、シャーピトゥムではなかったとは考えられないだろうか。

イトウル・アスドゥがマリ地区のシャーピトゥムではないとする、その間のマリ地区のシャーピトゥムは誰なのだろうか。イトウル・アスドゥに代わるマリ地区のシャーピトゥムとなると、今のところ候補となるのはバフディ・リムしかない。リオンは、ジムリ・リム治世四年末まではイトウル・アスドゥがマリ地区のシャーピトゥムを務めていたと考え、バフディ・リムのシャーピトゥム就任時期をジムリ・リム治世五年としているが、そのように明記した史料があるわけではない。しかも、バフディ・リムが書いた書簡で、治世五年以前のものと考えられるものが二つある。一つは、ARM 26-201(=ARMT 6-45)で、バフディ・リムは「マリの町、王宮および地区は平穏です」という定型句を使っているから、このときすでにマリ地区に責任の

ある立場であった。この書簡だけでは時期が特定できないが、バフデイ・リムの書簡に出てくる「アフムがわが君宛てに送らせた書簡」とは、ARM 26-200のことだと思われる。この ARM 26-200 の内容から、この書簡が書かれたのはジムリ・リム治世三年末だと推測されている。

ARM 26-201(=ARM 6-45, LAPO III 938)

「わが君に伝えよ。臣バフデイ・リムが申し上げる。マリの町、王宮および地区は平穏です。話変わって、サンガ(神官)であるアフムが、ムフトウム(女預言者)の髪と服のへりを私に送ってきました。そして、アフムがわが君宛てに送らせた書簡に、詳細は記されています。今、アフムの書簡、ムフトウムの髪と服のへりを、わが君のもとへ送らせました⁽⁴²⁾」

ARM 26-200

「わが君に伝えよ。臣であるアンヌニートウムのサンガ、アフムが申し上げる。ムフトウムのフバトウムが次のように神託を下しました。「この国に対する風が吹きあがるだろう。そして私は、その翼と二つの首に求めるだろう。ジムリ・リムとシムアル族が彼らの収穫を行えるようにと。ジムリ・リムよ、国土すべて

を手放すことなかれ」と。そして再び、この者は次のように申しました。「ヤミン部族よ、なぜお前たちはもめ事の原因となるのだ⁽⁴³⁾。私はお前たちに問うだろう」と。このことをそのフバトウムは申しました。今、その女の髪と服のへりをわが君のもとへ送らせました⁽⁴⁴⁾」

デュランは、「二つの首」とはマリ王国の二つの敵、ヤミン系部族とエシユヌナのことではないかと推測している⁽⁴⁵⁾。この二つの勢力は、ジムリ・リム治世四年に手を組み、マリに敵対した。マリでの収穫は年のはじめに行われるから、この書簡が書かれたのはジムリ・リム治世三年末だと考えられる⁽⁴⁷⁾。

また、ヤミン系部族は、ジムリ・リム治世二年にジムリ・リムに対する最初の反乱を起こしている(ジムリ・リム治世三年の年名が「ジムリ・リムがヤミン部族の長を殺した年」⁽⁴⁸⁾)。そのため、この書簡はジムリ・リム治世一年末、ヤミン系部族の最初の反乱前に書かれたと考えることもできるかもしれないが、バフデイ・リムが書いたもう一つの書簡 ARM 26-177 から、ヤミン系部族の最初の反乱のとき、バフデイ・リムはまだマリ地区にいなかったのではないかと思われる。ゆえにこの書簡の時期は、やはりジムリ・リム治世三年末であろう。

リオンはこの問題について、ARM 26-201が書かれた時期は、イトウル・アスドゥがマリ地区のシャーピトゥムを務めていたから、バフデイ・リムはマリで何らかの役職にはついていたけれども、それはシャーピトゥムではなかったとしている。⁽⁴⁹⁾しかし、逆に「マリの町、王宮および地区は平穏です」という定型句を使っているバフデイ・リムこそが、ヤミン系部族との抗争のときに、マリ地区のシャーピトゥムを務めていて、イトウル・アスドゥはマリ王宮で何らかの役職についていたとは考えられないだろうか。

シャーピトゥムと王宮の高官の権限の違いについて、ただはつきりしたことは言えないが、必ずしもシャーピトゥムの方が権限が上だとは言えないようである。というのも、シヤンダバツクムであるヤシム・スムはカトウナン地区まで赴いて、刈り入れ時の人員配置の指示を出したり、カトウナン地区のル・ディリツガへの麦の割り当て量を減らしたりしているのだが、⁽⁵⁰⁾カトウナン地区のシャーピトゥムであつたザキラ・ハンムは、ヤシム・スムのやり方に困惑し、彼を何とかしてくれと王に懇願している。ゆえに、シャーピトゥムにも王宮から来た高官に指図する権限はなかったのだといえる。

イトウル・アスドゥは、ジムリ・リム治世四年末のものであるM.11200⁽⁵¹⁾で、サガラトゥム地区の者として名を挙

げられており、先に提示したARM 1481のヤキム・アツドゥの書簡からイトウル・アスドゥがサガラトゥム地区のシャーピトゥムであつたことは確かであるから、彼はジムリ・リム治世四年末にはサガラトゥム地区のシャーピトゥムに就任していた。

4 カトウナン地区の特殊性

カトウナン地区でシャーピトゥムであつたことが確実なのは、アキン・ウルバム(表⑩)、イッディン・アンヌ、イルシュ・ナツイル(表⑪)、ヤタルム(表⑬)の四人だが、カトウナン地区にはシャーピトゥムと全く同じ定型句を使う官吏が少なくとも四人いる(ザキラ・ハンム、ラウム、ジムリ・アッドゥ、ハドニ・イルマ)。そのうち、ザキラ・ハンム、ラウム、ジムリ・アッドゥは同じ時期に現れており、三人ともがシャーピトゥムというのはいえな

い。

この三人の中で、リオンはザキラ・ハンム(表⑫)をカトウナン地区のシャーピトゥムとしている。確かに、ザキラ・ハンムは穀物の刈り入れ、灌漑用の運河の浚渫、神殿や城塞の壁の修復、イダマラツ地方やヌムハ・ヤムトバル地方の情勢把握、カトウナン地区の長老(sugi)との協議

など多岐にわたる仕事をこなしており、シャーピトゥム職にふさわしいと思われる。ジムリ・アッドウ（表⑭）は、カトウナン地区の徴税に携わったりしてシャーピトゥムと考えられないこともないが、ARM 27-100で、「シャーピトゥムとアブ・ビーティムに宛てて書簡を出した」と述べているから、ジムリ・アッドウ自身はシャーピトゥムでもアブ・ビーティムでもない。ジムリ・アッドウはカトウナン地区のシャーピトゥムが王宮に行ったり、近隣の王国に赴いたりして地区を不在にした際の代理人とも考えられるが、まだ確かなことは言えない。リオンは、ジムリ・アッドウの職務は部分的にシャーピトゥムであるザキラ・ハンムとかぶるが、やはりシャーピトゥムと比較すると特化されていたり、限定的だったりすると述べている。⁵⁴ ラウム（表⑬）に関しては刊行されている書簡の数が少なくよくわからない点が多い。ARM 27-60でザキラ・ハンムがラウムに言及しているから、このラウムがカトウナン地区のラウムと同一人物だとすれば、ラウムはザキラ・ハンムと同時期にカトウナン地区にいたことになる。

ハドニ・イルマ（表⑮）は、A.571⁵⁶でジムリ・リム治世一一年末にイダマラツ地方にある小国、アシユナツクムの王となったシャドウム・ラブアについて触れており、もしハドニ・イルマがカトウナン地区のシャーピトゥムであつ

たなら、その任官時期はザキラ・ハンムの後、ヤタルムの前となるが、あまりに在任期間が短くなるため、リオンはシャーピトゥムではなく、ほかの役職についていたのではないかと推測している。⁵⁸ 一方デュランは、ハドニ・イルマはヤタルムの前か後にシャーピトゥムであったのではないかと考え、⁵⁹ ギロはヤタルムの前か後にシャーピトゥムではないかとしている。⁶⁰

カトウナン地区には、なぜこのように地区全体に責任を負う官吏が多くいるのか。まだ確かなことはいえないが、カトウナン地区がイダマラツ地方やヌムハ・ヤムトバル地方の近くにあるということは、理由の一つとして考えられるのではないかと思う。イダマラツ地方には、数多くの小国があり、ジムリ・リムは即位して以来、娘を嫁がせたり、自ら遠征したりして、この地をマリ王国の支配下に置こうとしてきた。マリ王国に服属している国が多いとはいえず、常にマリ王国に忠実であるとは限らず、その動向は常に監視しておく必要があった。ヌムハ・ヤムトバル地方にもいくつかの王国があり、マリ王国と同盟を結ぶこともあれば、マリ王国の敵であるエシュヌンナ王国やエカラトゥム王国などと同盟することもあり、情勢が安定しない。カトウナン地区では、その動向を見極めるためか、シャーピトゥム自らがヤムトバル地方の中心的な王国であるアンダ

リクへ赴き、マリ王国へ来るようアンダリク王を促したりもしている⁽⁶¹⁾。このような不安定な地域を北にも東にも抱えていたために、有事の際、柔軟に対応できるよう、多くの官吏が配置されていたのかもしれない。

5 おわりに

これまで見てきたように、リオンがシャーピトゥムとして挙げた人物のうち、イトウル・アスドゥだけは、マリ地区のシャーピトゥムではなかったのではないだろうか。定型句はそれを使っている人物の役職上の責務を端的に表したものだと考えられるため、地区の行政をあずかるシャーピトゥムが定型句で「地区」に言及していないのは不自然である。そして逆にジムリ・リム治世三年の書簡で、定型句に「地区」という言葉を入れているバフデイ・リムは、これまで考えられていた時期よりも早くマリ地区のシャーピトゥムに就任したと考えることができる。

しかし、定型句の基準からするとシャーピトゥムと考えられるにもかかわらず、シャーピトゥムではない人物が、カトウナン地区には数名いる。本論文で「地区」と訳した「ハルツム」という言葉を、定型句で使用している官吏はシャーピトゥムだけではないから、「ハルツム」に言及し

ていても、その人物が必ずシャーピトゥムであるとは限らない。だが、今回名前を挙げたカトウナン地区の官吏たちは、シャーピトゥムと全く同じ定型句を使用しているのである。この問題については、まだ明確な答えは出ておらず、今後の課題としたい。

カトウナン以外の地区についても、やはり地区ごとに考えるべき問題がある。マリ地区には、シャーピトゥムのほかにスツカルという役職があった⁽⁶²⁾。ヤスマフ・アッドウ時代のスツカルであると考えられているタリム・シャキム⁽⁶³⁾やラウム⁽⁶⁴⁾は、「すべては平穩です。マリは平穩です、マトウム(国土)は平穩です⁽⁶⁵⁾」とか「マリは平穩です、マトウム(国土)は平穩です⁽⁶⁶⁾」という定型句を使っており、ここから考えると、シャーピトゥムはマリ地区に、スツカルはマリ王国全体に責任をもっていたと言える。しかし、ジムリ・リムが遠征に出ているとき、シャーピトゥムであるバフデイ・リムがバビロン王ハンムラビの書簡を受け取ったりしている。他国の王とやり取りをしているシャーピトゥムはバフデイ・リムだけではないが、このような外交に関する職分はどのように分けられていたのだろうか。テルカ地区のシャーピトゥムであるサムメタルやキブリ・ダガンは、定型句でダガン神に触れている。またキブリ・ダガンはサムメタルの息子だと考えられており、それが正

しければ、テルカ地区は同一の家系によって治められていたことになる。サガラトゥム地区のシャープトゥムであるヤキム・アッドゥは、定型句を使っている書簡が少ないが、その中でドゥール・ヤフドゥン・リムに触れているものがあつた。ドゥール・ヤフドゥン・リムは軍団の集結などに使われていることがあり、シャープトゥムと軍隊の關係性についても今後、研究を進めていきたい。

略号表

- ARM Archives royales de Mari, Paris
- CAD The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago, Chicago
- LAP0 Littératures anciennes du Proche-Orient, Paris
- M.A.R.I. MARI annals recherches interdisciplinaires, Paris
- OBTR Dalley, S. et al., *The Old Babylonian Tablets from Tell al Rimah*, London, 1976
- R.I.M.E, 4 Frayne, D.R., Old Babylonian Period(2003-1595 BC), *The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Periods*, Volume 4, Toronto, 1990

参考文献

- Biro, M., 1993, *Correspondance des gouverneurs de Qatunân*, Paris: Editions Recherche sur les Civilisations (ARM 27)
- Cazelles, H., Briand, J., Tassin, C., 2008, *Supplément au Dictionnaire de la Bible, Fascicule 77-78*.
- Charpin, D. et al., 1988, *Archives épistolaires de Mari I/2*, Paris: Editions Recherche sur les Civilisations (ARM 26/2)
- Charpin, D., 1990, "Les Mots du Pouvoir dans les Archives Royales de Mari (XVIII^e siècle av.J.-C.)," *Cahiers de Centre G. Glotz* II, pp. 3-17.
- Charpin, D., 1993, "Un Souverain Ephémère en Ida-maraš: Išme-Addu d'Ašnakkum," *MARI* 7, pp. 165-191.
- Charpin, D. et Ziegler, N., 2003, *Mari et le Proche-Orient à L'époque amorrite*, Paris
- Dossin, G., 1972, "Adaššum et Kirnum dans des Textes de Mari," *RA* 66, pp. 111-129.
- Durand, J.-M., 1988, *Archives épistolaires de Mari I/1*, Paris: Editions Recherche sur les Civilisations (ARM 26/1)
- Durand, J.-M., 1990, "ARM III, ARM VI, ARMT XIII, ARMT XXII," *De la Babylonie à la Syrie, en passant par Mari*, pp. 149-177.
- Durand, J.-M., 1994, "Administrateurs de Qatunân," *FM* II, pp. 83-114.
- Durand, J.-M., 1997, *Les Documents Épistolaires de Mari I (=LAP0 I)*
- Durand, J.-M., 1998, *Les Documents Épistolaires de Mari II (=LAP0 II)*

Durand, J.-M., 2000, *Les Documents Épistolaires de Mari III (=LAP0 III)*

Durand, J.-M., 2004, "Peuplement et Sociétés à L'époque Amorrite," *Amurru* 3, pp. 111-197.

Guillot, I., 1997, "Les Gouverneurs de Qatfunân : Nouveaux Textes," *FM II*, pp. 271-290.

Jean, C.-F., 1948, "Lettres de Mari IV," *RA* 42, pp. 53-78.

Lion, B., 2001, "Les Gouverneurs Provinciaux du Royaume de Mari à L'époque de Zimri-Lîm," *Amurru* 2, pp. 141-209.

Marzal, A., 1971, "The Provincial Governor at Mari: His Title and Appointment," *JNES* 30, pp. 186-217.

Ozan, G., 1997, "Les Lettres de Manatan," *FM III*, pp. 291-305.

Villard, P., 1994, "Nomination D'un Scheich," *FM II*, pp. 291-297.

Villard, P., 2001, "Les Administrateurs de L'époque de Yasmah-Addu," *Amurru* 2, pp. 9-140.

Ziegler, N., 1994, "Deux esclaves en fuite à Mari," *FM II*, pp. 11-21.

中田一郎 二〇一〇「ジムリ・リム治下のマリ王国の遊牧民支配—放牧地の長メルム役人の役割を中心に—」『中央大
学人文研紀要』68' 三八七—四二二。

註

(一) ヤフドウン・リムは、ジムリ・リムの実父ではなく、祖父もしくは叔父だが、ジムリ・リムは王号の多くで「ヤフドウン・リムの子」と称していた。自身がヤフドウン・リムの王朝の正統な後継者であることを強調するためだと考えられている (中田二〇一〇、三九〇—三九二、Charpin et

ジムリ・リム時代のシャーピトゥムの責務

Ziegler, 2003, 175)。

(2) Charpin et Ziegler, 2003, 180.

(3) Cazelles, Briend, Tassin, 2008, 307.

(4) Lion, 2001.

(5) MARI I, 102-103.

(6) I *su-mu-ha-du-ú ša-pi-tum*.

(7) *ba-ah-[di]-ti-im ša-pi-tim*.

(8) ARMT 14-81, 1.17-22: *ša-ni-tam su-um-hu-ra-pi ša-pi-ti-ta m i-na ha-la-as [a]ga-ra-tim^{ki} i-pe-e]šⁱ-ma 1 šu-ši gán eqlam [i-n]a Bi-ak-ka-ka¹ sa-bi-it ú i-tir-ás-du iš-ša-ki-in-m[a] i-[n]a zi-[b-n]a-[tim^{ki} ki-ma] a-lik pa-ni-[šu X gán a-ša iš-ba-at] i-[n] a-an-n[a X gán a-ša aš-ba-at (L.20-22 の復元) LAPO II, p. 538, 12. 24(8)。*

ユー・ト・ムツカカ、シブナ・ムツムは、
シバガト・ムツム地区に於ける土地 (cf. ARM 16/1, 8, 41)。

(9) ARMT 2-37(=Charpin, 1993, 185, no.8). *na-wu-um ú dumu si-im 'a₄-al ša-tim*。
ナ・ウ・ムツム 文 p.184 の A.2226 (n.7) の定型句として復元できよう。シャルパンは次のように復元している。
[na-wu-um] 'ú dumu-mes³ si-im 'a₄-al [ir-d]u-'ka¹ [ša-tim].

(10) ARM 26-346, *a-lum na-hu-ur^{ki} ša-tim*.

(11) Marzal, 1971, 200, Charpin, 1990, 13.

(12) Lion, 2001, 153.

(13) 「ハルツム」という言葉は、誰が使うかによって意味が異なる。たとえば、マリ王ジムリ・リムも「私のハルツム」という表現を使っていることがあり (OBTR 2)。
その場合の「ハルツム」は「地区」ではなく、マリ王国全体を

- (47) リオンもこの書簡の時期は、ジムリ・リム治世三年末と推測している (Lion, 2001, 198)。
- (48) Charpin et Ziegler, 2003, 247, 258.
- (49) Lion, 2001, 186.
- (50) ARM 27 38, 39, 44.
- (51) Durand, 1990, 152-153.
- (52) ARM 27 25-98.
- (53) *a-na lu ša-pi-ti-im u lu a-bu e-tim aš-pu-ra-am*. 地区におかれたアブ・ビーティムは、シャーピトゥムの補佐役と考えられている (Lion, 2001, 147)。
- (54) Lion, 2001, 170.
- (55) ジムリ・リム時代初期にテルカのシャーピトゥムであったサムメタルの父親で、ヤスマフ・アッドゥ時代の高官であった人物もラウムという名であったが、ヤスマフ・アッドゥ時代のラウムとカトゥナン地区のラウムはおそらく別人であろうとされている (Durand, 1994, 96)。
- (56) Durand, 1994, no.63.
- (57) Charpin, 1993.
- (58) Lion, 2001, 173.
- (59) Durand, 1994, 103.
- (60) Guillot, 1997, 286.
- (61) ARM 27-72.
- (62) ジムリ・リム治世では、ハブド・マリクが「*ḫ*」という役職名をもっている (ARMT 3-37)。
- (63) Villard, P., 2001, 20-23.
- (64) ジムリ・リム時代の初期にサガラトゥム地区のシャーピトゥムを務めたサムメタルの父親で (RIME 4, no.2002) カトゥナン地区の高官ラウムとは別人だと考えられている (Villard, 2001, 23-24)。
- (65) ARMT 5-26, *ša-[i]*-i]m* ša-lim ma-ri^{ki} ša-lim ma-a-tum [š] a-al-ma-at. ša-[i]*-i]m** はネエランによる復元 (LAP0 I, p. 405, 32.)。
- (66) ARMT 5-81, A.2342(=ARM 26/1, p.42), *ma-ri^{ki} ša-lim ma-a-tum ša-al-ma-at*. ARMT 5-84 は一部復元。
- (67) キブリ・ダガンは、ARMT 3 67, 82 でサムメタルに対し「あなたの息子」DUMU-ka-a-ma と名乗っており、これは目上の者に対し「息子」と言っているのではなく、本当の親子関係なのではないかとリオンは考えている。